

1. 担当PM

増井 俊之 PM(慶應義塾大学 環境情報学部 教授)

2. 採択者氏名

チーフクリエイター: 重田 桂誓(筑波大学大学院 図書館情報メディア研究科)

コクリエイター: なし

3. 委託金支払額

1,761,600 円

4. テーマ名

Web キュレーションシステムの開発: 表紙が彩る新しい情報空間

5. 関連Webサイト

<http://hyoushi.jp/>

6. テーマ概要

本提案では、あるテーマに関する情報を、受け手にとって分かりやすく、魅力的に見せるための、Web キュレーションシステムを開発する。

Web 上では、多くの人間によって価値ある情報が日々発信・蓄積されている。しかしながら、その内容や魅力が十分受け手に伝わらないまま、埋もれている。この問題を、美術館や博物館では「キュレーション」によって解決している。キュレーションとは、作品や資料の作り手と受け手の間に、第三者(キュレータ)が入り、あるテーマが持つ広範で奥深い世界を、分かりやすく、魅力的な形に編集して見せることである。

このキュレーションこそ、今の Web に必要ではないだろうか。だが、Blog や SBM(ソーシャルブックマーク)など既存のシステムでユーザができることは情報の発信や蓄積にとどまっており、編集はできない。また、芸術作品と違って、Web ページの多くはテキストで構成されているため、その内容を一目で直観的に伝えることはできない。

そこで本提案では、Web ページの表紙を自動生成するエンジンと Web キュレーションシステムの2つを開発する。これにより、多くの人が発信・蓄積した情報で溢れる空間を、第三者が分かりやすく魅力的な形に編集して、見せることができる。そうしてつくられる空間は、表紙に彩られた新しい情報空間である。表紙があることで視認性が向上し、受け手は情報の内容を直観的に把握できる。同時に、空間全体を俯瞰でき、情報を多面的に捉えられる。その結果、意外な情報や自分に合った情報を得やすくなる。それは、まるでギャラリーを見るかのように楽しく情報にふれあえる体験である。

7. 採択理由

提案者の重田君は本や書店が好きで、特に専門家によって「キュレーション」された書店が好きだということである。キュレーションとは、「第三者であるキュレータの視点で、あるテーマが持つ情報の世界を分かりやすく魅力的に表現すること」で、様々な本をキュレータの力によって集めて分類して魅力的に仕上げた書店が最近各地で話題になっている。重田君は実際に学園祭でこのような書店を企画して人気を呼んだということである。

本にはその内容をうまく表現する「表紙」があるためキュレーションがやりやすくなっている。私も「本棚.org」という書籍情報サイトを運営しているが、表紙を並べることによって様々なテーマの「本棚」を作ることができるのが面白いところである。一方、Web サイトをうまくキュレーションするシステムは現存しないようだが、重田君の考えによればこれは Web サイトには「表紙」が存在しないことが大きな理由であり、キュレーションをやりやすくなるような表紙を Web サイトに用意して解決することを提案している。

Web ページの内容が一目でわかるような表紙があれば、確かに Web サイトの整理やキュレーションがやりやすくなり、新しい楽しみ方が出てくる可能性があるであろう。重田君は、格好良い表紙を自動生成する方法を考え、また Web キュレータを育成する方法についても考えるという提案をしている。前者はなかなか難しいかもしれないが、「Web キュレーション」という考え方を普及させるようなサービスの開発を頑張りたいと思っている。

この提案がうまくいけば、Web サイトを集合的に扱うという新しい利用法が普及することであろう。

8. 開発目標

Web ページを書籍の表紙のように魅力的に表現する手法と、それを奇麗に並べて一覧できるようにする手法を開発する。

9. 進捗概要

「如何にして Web ページを書籍の表紙のように表現するか」「いかにしてそのようなページを美しく並べて提示するか」はともに難しい課題である。当初は、HTML ファイルから自動的に表紙ページを作成することを計画していたが、思わしい結果が得られにくいので、サイトごとにテンプレートを用意する方法に変更したところとりあえず見栄えの良い表紙を生成することができるようになった。生成された表紙のレイアウトは手動で行なうようにした。

10. プロジェクト評価

このような「Web キュレーション」は情報提供者にとっては楽しく、通常のユーザにとっては有益なものであると考えられるので、この考え方は今後人気が出る可能性があると思われる。キュレーションを完全自動化することは難しく、今回のプロジェクトでは自動化とは程遠いものしかできなかったが、キュレーションという新しい考え方を提唱し、プロトタイプを実証できたことを評価したい。

11. 今後の課題

現状のような不完全な形であっても世の中にソフトウェアを公開することによって Web キュレーションという考え方を広めれば、別の人間によって新たな手法が考え出される可能性があるだろう。なんらかの形で世に出すことを薦めたい。